

# 1. 伊那谷研究団体協議会のあゆみ

## 1-1. 飯田下伊那研究団体連絡協議会（地研連）発足までの経過と設立の趣旨

### 1-1-1. 発足前史

伊那谷は、東の赤石山脈と伊那山地、西の木曾山脈に挟まれた日本最大の谷である。生物多様性に富む自然に恵まれ、そのなかで特色ある歴史・文化が育まれてきた。この地域は古くから学問や研究が盛んな地域であった。特に、近世には寺子屋教育などの私塾が多数開かれ、幕末には平田学が盛んになった。明治維新後には養蚕業が盛んになり、これらの文化や経済力を基礎として、新たな学術・文化活動が展開した。

その一例として、全国的に知られる郷土史誌『伊那』をあげることができる。各旧町村につくられた伊那史学会の地域研究会は現在まで脈々と息づいている。こうした市民の学びの蓄積に支えられ、民俗学研究の拠点である「柳田國男記念那民俗学研究所」が誕生し、さらに伊那谷の自然を探求する「伊那谷自然友の会」が結成されて精力的な活動が展開されるなど、飯田下伊那地域は全国的に見ても数多くの市民研究団体が叢生してきた地域である。

戦後、いくたびか、このような各分野における市民による研究団体を結集する試みがなされたが、自由と独立を旨とする各団体の横のつながりを生み出すことは困難であった。連絡会や連合会などの組織を結成するには至らなかった。

### 1-1-2. 連絡協議会設立の呼び掛け

平成に入り、一部の研究者のなかから、地域の研究団体が相互に連携しながら研究を推進することが不可欠であるとの声が高まってきた。そして、ついに、平成7（1995）年、金属の会の提案に端を発し、伊那史学会・下伊那考古学会・柳田國男記念伊那民俗学研究所・伊那谷自然友の会、その他の研究団体の役員が連絡を取り合い、飯田下伊那全域の研究団体の結集を呼びかけるに至った。

その声掛けが次第に共感を呼び、平成8（1996）年11月23日、飯田市美術博物館に14団体が集まり、ここに合意が成立し、「飯田下伊那地域研究団体連絡協議会」（地研連）が設立された。このことは全国的にも希少な例として注目された。

### 1-1-3. 「地研連」の設立趣意書

飯田下伊那地域研究団体連絡協議会の発足に向けて、その趣意書の原案が提案され、各研究団体の役員の間で文案が推敲された。何回かの修正を経てできあがった趣意書は以下のとおりである。

## 設立趣意書

私たちの住むこの飯田下伊那地方は、豊かな自然に恵まれる中で、多種多様な特色ある歴史文化を育んで来ました。そしてこの伝統は、現在、住民が自発的に行う芸術文化と学術研究の活発さとなって息づいています。

当地にあって学問的な調査研究を志し、あるいは学術的視点を持ちながら活動する団体は数多くあります。それぞれが個性あるテーマや組織をもち、さまざまな活動を繰り広げています。個人会員には学際的な生涯学習の機会となり、さらに地域文化の見直しに役立っているといえます。

しかしながら、これまで地域研究団体が相互に連絡、連携して活動することはあまりありませんでした。このことは、個人会員が学際的な活動を進める上で効果的でないばかりか、地域文化の保護と発展を図る上で大きな力とはなりにくい状況にありました。当然ながら、こうした反省は過去、幾度となく叫ばれてきましたが、具体的な解決策に踏み出せないまま今日を迎えています。

そこで今回、「飯田下伊那地域研究団体連絡協議会」を設立いたします。地域研究団体をネットワークで結んで相互の連絡、連携を強め、ときに共同することで、地域研究団体の活動と市民の研究活動を活発にし、地域全体の学術向上に寄与することをめざしています。御賛同いただける団体の皆さまには、是非ともご参加くださるようお願い申し上げます。

## 事業

- (1) 各地域研究団体間の情報交換を行う。
- (2) 地域研究団体の活動を相互に支援する。
- (3) 各地域研究団体が共同して、学術活動のための条件整備、ならびに自然や文化財の保護に努める。

設立に当たって各研究団体の役員間で激論が交わされた。それは、連絡協議会の事業が肥大化すると、本来の各々の研究団体の自由・自主・独立の研究活動が圧迫される恐れがあるとして、連絡協議会の活動を必要最小限に留めるべきであるという意見をめぐるのであった。慎重な論議の末、事業活動は年一回のシンポジウムに留めることとなった。また、事務局会議などは極力通知を出さず口頭で連絡するなど、地研連の役員及び事務局員の負担軽減を図ることとなった。